「奉仕、からだを建て上げる」

エペソ人への手紙４：１２

March.10.2024

エペソ人への手紙４：１２（パワポ）

Preface

先週は、エペソ４：１２－１６節の御言葉から、「幼稚さからの脱却」ということについて考えました。

今朝は、今読みました４：１２の御言葉にフォーカスして、奉仕について考えてみたいと思っております。

私が初めて教会の奉仕をしたのは、大学３年生の頃で、めぐみ教会のオープン礼拝（当時は夕拝と言っていましたが）のコーラス奉仕だったと思います。

賛美を歌うのがとても好きで、一人暮らしをしていたアパートの扉を全開にして、ギターを力任せにジャガジャガ掻き鳴らしながら大声で賛美したり、履歴書などの趣味の欄に、恥ずかしげなく「賛美」と書く程でしたので、夕拝のコーラス奉仕は楽しんですることが出来ました。

何度かコーラスの奉仕をした後、今度はワーシップリーダーとして奉仕させて頂くこととなったのですが、コーラスの奉仕とは違い、ワーシップリーダーの奉仕はただ楽しいだけではなく、苦しさや難しさを感じました。

曲がりなりにも礼拝の賛美を導く者として前に立つわけですから、それなりのプレッシャーも感じ、私なりに心を込めて選んだ賛美曲を仲間の青年たちと準備するのですが、賛美の練習も人と人とのやり取りになりますので、感情が行き交い関係がギクシャクしたり、技術が云々と言いながらぶつかることもあるわけです。

ある日の練習中、「じゃあ、いいよ。そんなだったら賛美すんの辞めよう！」と、私がプチギレしてしまいました。

すると、不思議なことに、雨降って地固まるじゃないですが、そのことを境に皆で真剣に祈るようになり、互いの不足を補い合いながら、皆で賛美の練習をすることを喜べるようになっていきました。

それでも、日曜日の礼拝当日を迎えるまでは、緊張で眠れなかったり、夜中に目が覚めたり、夢の中で前に立って賛美をしている夢を見たりと、本当に神さまに祈らずにはいられないような時間を過ごしました。

その時、身をもって、「ああ、教会の奉仕は、自分という人間を嫌でもイエス様に繋げてくれる働きをするんだなあ」と思わされました。

「キリストのからだなる教会の部分として建て上げられ、ともに成長していく

ためになくてはならない必要なものなんだなあ」ということを初めて実感したような気が致します。
　そして何よりも、それまで何物をも通しても得ることの出来なかった、空しくない喜びが与えられることを深く感じました。

「真剣さゆえなのか、罪深いためなのか、人とぶつかることもあれば、協力することもあれば、挫折することもあれば、喜ぶこともあるけれども、そのすべての経験が地に落ちることはなく、キリストの身丈にまで達するための血となり肉となるためにしっかりと用いられていくのが教会奉仕であり、クリスチャンとして通るべき、通らされるべきところなんだなあ」と感じましたし、今でも感じております。
　正に、今日の聖書箇所が言っている通りですね。

エペソ人への手紙４：１２（パワポ）

「奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。」
　聖徒たちと共に成す教会奉仕は、イエス様に私たちを繋げてくれるように思います。
　また、イエス様に繋がっていないと、奉仕をやりたいとは中々思えないよう気がしますし、イエス様に繋がり続けるために祈ったり、御言葉を読んだり、賛美を口ずさんだりするよう導かれて行くように思います。
　そして、それらすべてが繋ぎ合わされて、キリストにある一人の成熟した大人へと達するよう導いて行ってくれます。

Part One

　こうは言うものの、実のところ私は、教会奉仕があまり好きではありませんでした。
　なぜかと言いますと、教会奉仕をやり続けるためには、日曜日以外の週日も、イエス様に繋がり続ける努力をしなければならなかったからです。
　もっと正確に言いますと、日曜日以外は、自分勝手に自分の思うままに生きたいと思っていたということです。

　なので、大学生の頃、何度も教会学校の奉仕をしないかと誘われたのですが、ずっと断り続けていました。
　大学生当時は、あまり子供が好きではなかったというのも理由でしたし、子どもたちに何だか見透かされてしまうかもしれないという恐れのようなものがありました。
　でも、そんな理由にならない理由のようなものを問い詰めていきますと、結局自分が、未熟な幼稚な子どもでありましたし、「いつまでもわがままな子供でいたい」と無意識の内に思っていた幼稚さがあったように思います。
　そんな大学生の私に、友人からつけられたあだ名は Big Baby でした。

でも当時の私は、「僕はちゃんとした熱いクリスチャンだし、一端の大人だし、これから神学校に行こうと思っている信仰だってあるんだ」と、先週の話じゃないですが、イエス様と３年間寝食をともにしても、「誰が一番偉いんだ？」といううう幼稚なことしか頭になく、そんな自分たちの幼稚さに気付けなかった弟子たちと全く一緒だったと思います。

かと言って、今が幼稚じゃないのかと言いますと、いまでも残念ながら幼稚ではありますが、少なくとも、キリストにあって成長したい、成長しなければと思えるようにはなりました。
でも昔は、そんな風にも思えず、むしろ、「俺の信仰に倣え！」みたいな高慢ちきさが確かにありました。
もちろん今でもありますし、夫婦喧嘩や親子喧嘩や神の家族を躓かせてしまう最たる理由が、そんな私の態度だということは、ちょっとですが、妻や子どもたちから指摘されて認められるようにはなりました。
大学生の頃私に Big Baby というあだ名が付けられたことを知らない我が家の子どもたちから、ある突然、「お父さんは、悪い意味ででっかい赤ちゃんだよね」と言われ、たじろいだことがあります。
まんまと見透かされました。

それでもまあ、キリストの身丈にまで、２６年前よりはちょっと、１ｃｍか２ｃｍかは成長しているんじゃないかと思いたいと思っております。
（でも、またこう言うと、これもまた高慢なんでしょうか？！）

Part Two

神さまはそんな奉仕嫌いの、勘違い野郎の大学生の私を放っておくことはありませんでした。

ついに神学校へと導かれるのですが、私の進んだ神学校を紹介して下さった宣教師の先生が、これから神学校に進む私にこんな言葉を下さいました。
「これから神学校に行って、神学生となり、伝道師となり、牧師となっていくと思いますが、その道を勘違いしている献身者が少なくないように思います。
神学生になり、伝道師になり、牧師となっていく人は、他の人たちよりも信仰に厚くてその道に進むのではなくて、神学生にならなければ、伝道師にならなければ、牧師にならなければ、どこに跳んでいってしまうか分からないイエス様から離れてしまう信仰的弱さを持っているから、神さまはその道へと導かれるのであって、信仰に厚いからでは決してありません。」
その言葉を聞いた直後は、分かった風な顔はしましたが、その言葉の意味が分かっていませんでした。

でも神学校に入学し、ギリシャ語特講が始まったその瞬間から今の今まで、その言葉の意味がずっと身に染みており、決して忘れることの出来ない言葉とな

っております。

教会の奉仕によってキリストの身丈にまで建て上げられることを拒み、子どもが好きではないという言い訳で、めぐみ教会の教会学校奉仕を拒み続けた私は、神学校に入ってから有無を言わせないようなところへと導かれて行きました。

私が入学した合同神学大学院大学校と言う韓国にある神学校は、去年ＴＣＵと協定を結びましたが、入学したすべての神学生が、３年過程の内２年以上有給で教会の伝道師として働かないと卒業出来ないという単位がありました。
ギリシャ語ヘブル語どころか、日本で生まれ育ったために韓国語もままならない私を伝道師として雇ってくれる教会があるとは思えませんでしたし、雇われたとしても、教会学校を担当する伝道師になることが大半でしたので、子供が好きではない私にとっては、「ああ、もうこの神学校は卒業出来ない。献身者としての道は終わった」と、本当に冷や汗が出るほどに絶望的でした。
当時お付き合いをしていた妻に、半泣きで、学校の公衆電話から電話したことを今でも覚えております。

ところが、そんな私に救いの手を差し伸べて下さった教会がありました。
それは、先程私に凄い言葉を下さった宣教師の先生を日本に派遣した母教会でした。
「困っている洪豊和に助けの手を差し伸べてくれませんか」と、ご自身の母教会に連絡を取って下さった宣教師先生のおかげで、２年半、伝道師として雇って頂くこととなりました。

そうして伝道師として担当したのが、小学校１年生から３年生までの幼年部でした。
子ども達５０名、先生方１５名ほどの所帯で、年間予算から、年間説教計画、夏季学校、教師会、家庭訪問、小学校前でのトラクト配布などを、神学校での学びと一緒にこなさなければならず、大きな祝福の時ではありましたが、「もう二度とあんな２年間は恐くて過ごせないなあ」と、今でも思ってしまうような奉仕働きでした。

そんな奉仕働きを通して得た最も大きな祝福は、子ども嫌いが直ったどころか、子どもたちがかわいくて仕方なくなったことです。
韓国語が下手過ぎなのでどうしようかと心配していましたが、むしろ、下手な韓国語を子どもたちが楽しんでくれ、また下手なので、一生懸命に話を聞いてくれました。
却って、韓国語が下手で、何にも出来ない能無し伝道師だったことが、災い転じて福となすじゃないですが、あわれみと慈しみと恵みを経験させて頂く要因となりました。

１５名ほどの先生方も、韓国語も出来ない、仕事も出来ない伝道師を迎えるにあたって、当初は不安を覚えておられました。
「こいつ、本当に大丈夫かなあ」と、始めのうちは意思疎通が上手く行かないこともありましたが、これまた、災い転じて福となすのようなことが起こり、能無し伝道師ゆえに、皆で協力しながら幼年部を作り上げていくことが出来ました。
もうただただ、イエス様のあわれみと慈しみと恵みでしかありませんでした。

神さまは、またここでも新たに、教会奉仕を通して、キリストのからだを建て上げる恵みと成長を経験させて下さいました。
互いにデコボコ同士、デコボコだから、神さまのご介入ゆえに一つとされ、ともに建て上げられていくということを分かち合うことが出来ました。
大変ではありましたが、感謝なことに一切の空しさなんかなく、キリストによって、からだ全体が、あらゆる節々を支えとして組み合わされ、つなぎ合わされ、それぞれの部分がその分に応じて働くことにより成長して、愛のうちに建てられていくという、正にキリストのからだを体験させて頂きました。

そして、「献身者はね、信仰が強いからではなく、直接献身と言う人生すべて教会奉仕というところを歩まないと、イエス様から離れてしまうような信仰の弱い人たちが行く道なんだから、謙遜にね」と仰った、あの宣教師先生の言葉が身に染みました。

Part Three

これまで長いことエペソ書を学んできましたが、その中で私たちが気付かされた最も大きな祝福は、私たち一人一人が、イエス・キリストにあって神の子とされたことのみならず、キリストをかしらとする教会なるからだを建て上げるために、その体の部分として私たち一人一人を召し出し、完成へと、キリストの満ち満ちた身丈にまで成熟させるその過程に入れて下さっているという事実です。

私たちは今、この教会という共同体の中で、互いが互いに組み合わされながら建て上げられ、成長していく重要な過程をプロセスを歩んでおります。
そして、エペソ書４：１２－１６の御言葉は、その教会という有機体の中で経験するすべてのことが、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するために必要なものであるということを教えてくれます。

つまり言うなれば、私たちが教会生活をしていて、「これは問題だ、あれも問題だ」と短絡的に残忍にも判断を下してしまいがちなモノやコトやヒトでさえも、それらすべてが、私たちがキリストの愛のうちに建て上げられることにおいて必要だということですね。

どこの教会においても、教会生活を送る中で、時に、「躓いた」とか、「躓かせた」とか、「傷ついた」とか、「傷つけた」とかということで、教会生活を辞めてしまったりすることがありますが、これは実のところ、霊的成熟においてとても勿体ないことですね。
来なきゃ来ないだけ損するところが、教会です。

一人で神に向かって礼拝をささげれば、それで終わりなのが、私たちの信仰生活ではなく、信仰の成長に必ず必要な要素は、人と交わることです。
教会生活には必ず他者との関係が伴いますが、ある意味奉仕は、その教会生活の深みへと入っていくことですし、深く入れば入るほど祝福があるのは当然のことですが、その祝福には、大概、人間関係が付随してきて、喜びもあれば、気まずいこともあれば、傷ついたとか、傷つけられたとか、もっと行きますと、一般社会では経験しないようなことまで人間関係において被る事もあるかもしれませんが、その中で、私たちは、人間という存在の隅々までを学びます。
知ります。
なぜならば、天地万物の造り主であられる神というお方を前にした、主イエスという救い主の内にある人間の本質を語り表せる場が教会であるがために、真に人間を知ることが出来ます。
自分という人が、どういう存在なのかを本質的に知ることが出来るところが、教会ですね。

大学生の頃、アメリカカリフォルニア州のサンディエゴからサンフランシスコまで１週間の旅程で、友人たちとシボレーアストロという８人乗りのバンを借りて、車旅行したことがありました。
その旅で、憧れの名門大学スタンフォード大学とＵＣバークレーに行って、観光見学をしにキャンパス内に入り、その周りの街を堪能しながら、写真を撮ったり、Ｔシャツを買ったり、グッズを買ったりして出て来ました。
それはそれは楽しい時間でしたが、その見学観光をもって、スタンフォード大学やＵＣバークレーに、本当に意味で入って出て来たとは言えません。
一生懸命に勉強してやっとの思いで入学して、入ったからには卒業するために頭を叩きながら一生懸命に勉強して、その暁に卒業出来たら、本当の意味でその学校に入って出て来たことになり、ただの観光とは比べものにならない経験と実りを得ることでしょう。

教会も同じだと思います。
表面をサッと見て経験した風で、それで終わるならば、まあちょっとは楽しいかもしれませんが、奥深い味わいにまで至ることは出来ないでしょう。
でも、入れば入るほどに、交われば交わるほどに、揉まれれば揉まれるほどに、人間という存在について正面切って知っていき、人間を知るからこそ、御霊によって一つとなることの凄みと喜びを実感出来、人知をはるかに超えたキリストの愛の説明のしようのない恵みを味わい、さらに、この世の中が決定的に失敗し

ている、神の前に成熟した一人の大人とされていくという、愛のうちに建て上げられていくという約束と祝福を確信するようになる場所が、教会です。

それが、神さまが、ご自身にとって比類なき唯一のひとり子イエス様を十字架に架けるまでして誕生させた教会の価値です。
教会の敷地に入るだけで、たった１時間の礼拝に出席するだけで、もちろん礼拝こそが一番尊いことですが、それだけでは勿体ないところが教会ですね。

教会は、「キリストともに十字架につけられ、もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられ、私はキリストにあって日々死んでいるのです」という人として最も貴いことを身に帯びさせて頂いているということを確認出来る場でもあるでしょう。
世の中では、日々人に勝つことを教え、考えなければなりませんが、教会では、日々人に対して負けることを学びます。
教会において人に負けようとする人は、敗北者ではなく、それこそ、信仰に生きようとする人であり、人に勝つことの空しさを知り、キリストにあって日々死ぬことの価値を悟りたいと願っている人だと思います。

そんなことを学べるのは、キリストのいのちの代価を払って買われた群れ、キリストのからだなる教会しかありません。
教会は、私たちの骨の髄に至るまで入り込み、私たちの本心・本体を掘り返し、暴き、取り出すために用意されているところです。
それが教会です。

ある意味面倒くさいところかもしれません。
でも、人間の本心・本体を知りたいと思うならば、これほど適した場所はこの世の中に存在しないでしょうし、神にあっての人間の本質を知れるということが特権、また責任であると思えるならば、こんなに感謝できる場もないでしょう。
私たちが生きているこの一般社会では、決して経験できない訓練されないことに直面し、訓練され、確認する場所として神さまが与えて下さったところでありますから、来なきゃ来ないだけそんなところが教会です。

Part Four

コロナ禍というところを通り、日本全国の教会にオンライン配信、オンライン礼拝という形や言葉が浸透しました。
それまで、教会に来ることのなかった家族と一緒に、家でオンライン配信を通して御言葉を聞くことが出来るようになったとか、体調や健康面、送迎の問題、または仕事などで日曜日の礼拝を礼拝堂で守ることが困難だった方々に、オンライン礼拝という代替案を提供出来たことは、神様が下さった恵みであったというのは事実だと思います。

その一方で、コロナ禍が過ぎてもなお、日本のみならず全世界の教会で、教会に戻っていらっしゃらない方々がおられることは、とても残念なことだと思っております。
もちろん、健康面や生活面や、または個人的な色々な思いや悩みでそうしておられることは重々承知しておりますが、来られるのに来ないならば、勿体ないなあと思ってしまうのです。

「まあ時代がそうなんだ」と言ってしまえばそれまでなのかもしれませんが、聖書を見ますと、「そんな時代だからこそ、集まることを辞めず」という御言葉があり、その御言葉をどう考えていけばいいのかと悩みながら、祈っております。

ローマ人への手紙１３：１１－１２（パワポ）
ヘブル人への手紙１０：２５（パワポ）

果たして私たちは、キリストにあって、今がどのような時であるのかを知っているでしょうか。
眠りから覚める時刻がもう来ていることに、気付いているでしょうか。
究極の救い、その日が、神の救いのわざの集大成なる終末・再臨の時が近づいているという霊的緊張感があるでしょうか。
あるならば、互いに集まって、励まし合いましょう。
ないならば、さらに集まって、励まし合いましょう。

「ある人たちの習慣に倣って、自分たちの集まりをやめる」ことは、今の時代で言うならば、個々人の世界で、個々人の思う世界観や価値観に沿って時を過ごすことであるかもしれません。
でもそれだけでは、いつのまにか、吠えたける獅子のように食い散らかすことの出来る人の魂という獲物を狙っている悪魔の術中にまんまとハマってしまい兼ねないことになるでしょう。

だから集まるのです。
それを確認し合うために、そして、ともにその日に向かって、キリストの身丈にまで達するために必要不可欠な場が教会であり、神様が私たちに備えて下さった属すべきからだが教会です。

旧約聖書のイスラエルの民たちもそうでしたし、孤独を神様に訴えたエリヤもそうでしたし、サウルから一人ぼっちで逃げ惑っていたダビデもそうでしたし、神様は、ともに主の恵みを分かち合う神の家族を用意し、彼らとともに生きる祝福を約束して下さいました。
何よりも、人間そもそも、一人では生きられないように神様が造った存在であり、最初の人アダムにも互いに助け合う人としてエバが与えられました。

教会は、徹底して人と人との関りの中で建て上げられるものであり、神にある人間関係の中に大切なことを神さまは用意し、待っていて下さっております。

そして、教会の奉仕は、その神さまが用意して下さっている祝福を味わわせて頂くために与えられた最たる機会でしょう。
この恵みに関わらない、飛び込まないのは勿体ないことですね。

先週、奉仕希望表が配布されましたが、祈りつつ、ぜひ教会奉仕に携わって頂ければと思います。
そこには、私たちがキリストの身丈にまで成長するための栄養分がたっぷりと、しっかりと含まれていますので、祈りつつ、取り組んで下さると感謝です。
もちろん、無理に進めているわけではありません。
出来る人が、出来る分だけ、出来ない人ともに一つとなって、感謝覚えながら行うのが奉仕です。
そこに誇りや功績のようなものは、ございません。

だから、私たちがキリストに繋がり続けるために、またキリストにある兄弟姉妹と繋がり続けるために何がいいのか、何が出来るのかを祈っていきましょう。

Conclusion

教会は、実力と知識が集まるところではなく、キリストにあって霊的に新しく生まれた者たちが、そして、これから生まれようとしている者たちが、神様の表現のしようのない恵みと祝福の中で集められ、一緒にヨチヨチ歩きから学び、言葉を学び、生き方を学ぶところです。

私たちは全ての面において不器用で、不慣れで、未熟で、下手です。
私が誰かを躓かせることもあれば、誰かが私を躓かせることもあります。
でも、そんな中、一つだけ知っておかなければならないことは、「もう我慢出来ない」と思ったその時、そのことを、「イエス・キリストならば、どのようにされただろうか」と、人の（他者の）問題ではなく、自分の問題として置き換えることが出来るようになるのが、キリストのからだなる教会に属している証だということです。

キリストに仕え、人に仕え、受難のキリストとともに死に与り、キリストの復活の恵みをもともに味わっていきましょう。
キリストにある奉仕が、私たちの体を建て上げていきます。
お祈りいたします。

祝祷：エペソ人への手紙４：１２